

◎古代の美作道・因幡街道

～たたら製鉄の道～

山陰は古くから鉄の生産が盛んで、たたら製鉄が各地で行われていました。播磨を経て美作の中心・津山盆地へいたる交通路が、古代律令国家の官道として整備される以前より早くから開けたのも、古代以来鉄の産地だった美作産の鉄を運ぶ道として重要な意味を持っていたからです。播磨でも美作道沿いに製鉄遺跡が見つかっており、『播磨国風土記』の讃容郡(佐用郡)の条には「山の四面に十二の谷あり。皆、鉄を生ず」と記されています。

美作道には、越部駅家と中川駅家の2つの駅家が整備されました。それぞれたつの市新宮町、佐用町三日付近にあったものと考えられ、古代の美作道は、播磨国府から美作国府に向かって、現在のJR姫新線や国道179号に沿って走っていたと考えられています。

STORY

相撲の神様、野見宿禰が通った道

『日本書紀』などに登場する野見宿禰は出雲の出身です。垂仁天皇に当麻蹴速と相撲をとるよう呼び寄せられて勝利し、そのまま天皇に仕えたといわれます。当時、偉い人が亡くなると古墳を作り、まわりに家臣たちを生きのまま埋める殉死の風習がありましたが、これに代わって人型の埴輪を作るよう進言したことで知られています。野見宿禰は奈良の都と出雲を行ったり来たりしていたようで、その旅の途中、現在のたつの市あたりで亡くなったといわれます。『播磨国風土記』には野見宿禰が亡くなったとき、出雲の人たちがやってきて、一列に並んで手渡して河原の石を運び、宿禰のために立派な墓を作ったと記されています。



野見宿禰神社

三日月の名前の由来

『播磨国風土記』の讃容郡の条には、三日月の地名について記されています。伯耆国の加具漏、因幡国の邑由胡という人が酒で手を洗うような驕った生活をしていたので、天皇は佐夜という人を派遣して都に連れてこさせることにしました。佐夜が2人をとらえて都へ向かう際、しばしば水につけて責めた(溺けし)ことから、この地を美加都岐原と名付けたそうです。山陰から都へ向かう道が佐用町を経由していたことが分かるエピソードです。

◎中世の美作道・因幡街道

～もののふが奔走した道～

中世の美作には突出した武士勢力が生まれず、山名氏が因幡・伯耆から南下し、浦上・宇喜多両氏が備前から北上し、赤松氏が播磨から西進し、尼子・毛利氏が出雲・安芸から備後・備中を通して東進するという各地の勢力のぶつかりあう地域でした。そのため、山陽道同様、室町幕府成立前後の争乱や嘉吉の乱の際の美作道は諸勢力の軍勢が東奔西走したと考えられています。特に戦国時代には、織田信長の中国攻めにおいても盛んに軍勢が行き来しました。

STORY

上月城の悲劇

上月城は播磨・備前・美作の三国の国境に位置し、織田信長と毛利氏との戦いの最前線となった歴史があります。もともと毛利氏に属していた上月城は、天正5年(1577年)、播磨攻めを進める羽柴(豊臣)秀吉により陥落。その後、秀吉は尼子家再興を狙う尼子勝久、山中幸盛(鹿介)に上月城の守りを命じます。翌年、三木城の別所長治が信長に反旗を翻すと、吉川元春・小早川隆景ら率いる3万の軍勢が攻め込み、上月城を包囲しました。秀吉は高倉山に陣をとるものの劣勢に追い込まれると、三木城攻略のため撤兵します。毛利氏の大群のなかに取り残された上月城は持ちこたえることができず、尼子勝久は降伏を申し入れて自害。山中幸盛も殺され、尼子氏再興の望みは失われました。この後、上月城は廃城になりました。



上月城跡

◎近世の美作道・因幡街道

～山陰の大名が参勤交代で通った道～

『慶長播磨国絵図』を見ると、山陽道と美作道、有馬道がほかの道筋よりも太い線で書かれていて、その重要性が分かります。参勤交代の道として、鳥取・津山・松江藩などの大名が利用しました。『江戸より松江まで道中図巻』(江戸時代後期)は、松江藩が作成した江戸から松江までの道中図で、街道沿いの宿場町の家並み、城や名所、旧跡、山や川などの景観が描かれたもの。播磨と美作の国境も描かれています。



『江戸より松江まで道中図巻』兵庫県立歴史博物館(江戸時代後期)